毎月1回20日発行　　第3種郵便物認可（昭和31年3月23日）　①

山と博物館

第 3 巻　No. 1　　1958年1月20日

征頂（大槍頂上）……法政大学山岳部……　　（橋爪芳男氏撮影）

大　町　山　岳　博　物　館

遺稿

吹雪の20日間

＝槍ケ岳北鎌尾根登行記＝

福島与一

故 福島 与一氏

○…昭和6年1月2日、長野県大町市に生れ県立大町中学（現大町南高校）山岳部員として北アルプス各地を踏破、昭和23年法政大学専門部へ入学、推薦部員として山岳部にはいった。その後春夏秋冬の各合宿には全部参加し、その間にも北アルプスの山谷をよく歩いた。26年3月、北仙人尾根合宿ではリーダーとなり、アタック隊員としてその強力な推進力とファイトにより、合宿を記録的短時日で成功させるとともに、同尾根積雪期初登攀の栄誉を荷った。

○…しかし26年5月、恒例の谷川岳合宿を迎え、27日から行動に移り、30日一の倉登攀をめざして一行8名は2隊に分れ、福島氏はA隊に参加したが（大町市出身の傘木徳十氏はB隊に参加していた）一の倉沢4ルゼンにおいて朋友3名とともに遭難した。時に20才。

○…氏は常に法大山岳部員によるヒマラヤ遠征を夢み、ひそかに期待されてもいたが、24年からはじめられた大町山岳博物館の創設運動にも献身的な活躍をつづけ、とくに山岳資料の收集に大きな功績を残した。

遭難の年の11月、山博は開館されたが、氏は待望の開館をも待たず地元山岳関係者に嘱望されながら短いその一生を閉じた。

× × ×

B・C集結まで

器具の整備や、食糧の調達やらで忙しかった体も、一面雪におおわれた闇せまる高瀬の渓谷を寒風にさらされながら、ガソリンカーに乗ってすすむと、やっと開放された気分でほっとさせられ、心の落つきをとりもどしたようだ。

荷物の遅延で、チーフのMさんと共に昼のバスで後を追うと、先発した一行に濁で追いつくことができた。平均10貫をオーバーする荷物に皆だいぶアゴのようだ。小憩のあと、今日の泊場である湯俣小屋へ向うもピッチ上らず時間もおそいので、第四発電所へ約30貫の荷物をあずけて行く。第五発電所をすぎると、ラッセルのあともなく周囲は夜の装いを深くする。

ライトの光をたよりに湯俣小屋へついたのは8時をだいぶすぎていた。

早速取入口の保科さんのところで飯をたいてもらう。皆は各自の装備の点検に余念がない。食糧係は食糧の分配に、器具係は器具の再検に、1時近く床につく。

明けて12日は、昨日のつかれで皆ぐっすりとねむり込んで朝飯は9時になる。2隊にわかれ、1隊はB・C（ベースキャンプ）となる千天出合へ荷を上げに、他は昨日の荷物をとりに第4へと出かける。昼近く小雪が降りだしてくる。我々は、正午B・Cへつく。宮田新道の最後の仕上げとなる釣橋をかけている宮田さんも、にこにこと我々を迎えてくれる。荷物をあずけて、3時頃帰ってくる。翌日はA・B隊はテント2張を張ってB・Cへ泊る。約200貫の物資の集結を完了して、いよいよ明日よりC・I（第1キャンプ）の設営と張切るも、夜中より気温ぐんと上って、めずらしい雨が降りだし、出鼻をくじかれたかたちで煙い小屋で1日をあかす。C隊は雨の中をB・C入をする。夜はB・C集結祝とやらで、デザートもでて、にぎやかな一夜をあかす。すきまから吹き込む風も、ひんやりと肌を刺す。明日の天気を祈りながら床につく。

C・I建設まで

晴れかと思った天候も小雪がちらついて居る。せまい小屋へ10人も横になると体半分もしびれんばかりだが、寒さを知らないのが、何より倖せだ。約4貫づつ持って全員荷上げに行く。雪は案外少なく輪カンも不要だ。

体の調子のととのわないのが何よりしゃくだ。多門治新道の悪場もちょっとショッパイがアイゼンをきかして登る。秋の偵察のおり、フィックスした針金がおおいに役だつ。稜線に出ると小雪まじりの風が頬を刺す。凍りそうな飯盒の飯をふるえながら食べて稜線づたいに進む。この付近は森林帯（タンネの森）なので風は弱いが、雪は多くなり、ときおり体がすっぽり没してしまう。14峰のコル（鞍部）へ荷物をデポして下って来た。

翌日はCIを2423米の独標(13峰)に設営して、A・B隊は入る。昨日と変らぬ風の中を、荷置場で昼食をとって出発する。相当に悪そうだった通称クマ落しも、かるく登れるも、荷の重いのに加えて、ラッセルに時間を食う。13峰近くなるとブッシュもなくなり、クラストした稜線を風に抗してすすんで行った。テント場につく頃には、夕闇がせまってくる。さっそくC隊の者に帰っても

らう。多門治の悪場で暗くなっても無事につくように祈りながら、新調のウィンバーの設営にかかる。この辺の千丈側は傾斜もゆるく、ダケカバは裸のまま寒そうに体をくねらせている。ダンネはところどころに寄りつどって、強い北風に抵抗している。テントの設営が終る頃にはまっくらになる。凍った装備をといて、テントへもぐり込み、ラジュスーの元気な音を聞いていると、やっと冬山へやって来たんだという気になり、ファイトも燃えてくる。設営も終り、あたたかい雑煮をたべてひと安心する。

翌日は昨夜降った雪で消えかかったラッセルの跡をたどって荷置場へ行ってくる。リーダーのOとKの二人は偵察に出かけたが雪崩におどろかされて帰って来る。新品だけにテントは快適だ。

C・Ⅱ建設まで

昨夜の雪もさほどでなかったらしい。朝飯の用意をしていると、テントに日がさしてくる。一週間ぶりの快晴かとよろこぶのもつかの間、風がはげしくテントをたたく。雪をとかしての炊事にはいらいらさせられる。

松本平の方は好天らしい。時たま顔をのぞかせる大天井のバックの青空が目にしみる。

昨日出たのであろう表層雪崩の跡もなまなましい。巨大な11峰のトラバースも無事にすんで10、11峰のコルにたっする。

ザックを置いて十峰のトラバースルートへザイルのフィックスにかゝる。すぐ下は約五十米の垂直な青氷の張りつめた壁となって、千丈側へ落ちている。１５米近い西風にあたっての作業は手足の感覚もなくなりそうだ。

部歌を声一ぱい唄って元気をつける。夜は就職試験で東京へ帰るO君に手紙を託そうと、ローソクの火を囲んで手紙を書くのに余念がない。

翌日は北鎌沢コルへ中継テントを張ってA隊が入る。昼食には待望のパンにバター、それにテルモスのあたゝかいミルクに舌づつみをうつ。今夜は久方ぶりに五人用にのびのびと３人になる。K君秘蔵のデザートを食べて満足する。さすがに広すぎて夜は相当に冷えこんでくる。

翌朝は夜中に吹きたまった雪でテントは半分もうまっているが、外は目もあかないほどまぶしい快晴のおとずれだ。東にはめずらしく、秀麗な姿で大天井が立っている北は鹿島、蓮華の山なみが、西は、三俣、鷲羽の連山が朝の大気を胸一杯にすって、純白の装いもあらたに立ち後には独標が雪煙のかなたにけむっている。

間もなくC隊も上って来る。今日は１日のんびりと休養する。明日も快晴らしい。山々は雲をふところにいまやねむりにつかんとしている。風もなく満天星を載いた三千米に近い、この冬山の夜は静かにふけて行く。

三日月は１人ぽっねんと独標の上にかかって何んだか悲しくなってくるような夜だ。

翌朝はA隊ラジュースの故障で前進出来ぬとの報せにはがっかりした心も沈んでくる。だが戦いはこれからだとテントの整備に又１日を暮す。天候は翌日からくずれはじめたが、一刻も早く天狗の腰掛への第二キャンプを出したい一念で朝５時に目をさましたが駄目だ。停滞の日のゆうつさ。歌でなぐさめてすごす日々。

それもついに26日我々は張切った気持で、７時に出発してA隊と一緒になり設営に向う。風は相変らず強いが、今日のチャンスを生かさんとファイトが湧く。２０米の強風に抗して、正午天狗の腰掛につく。2900米のここでは、遠く富士山をバックに赤石、聖（ひじり）の南アの連峰も望まれ、東は志賀高原方面もかすんでいる。眼前には、ヒマラヤを思わせるような独標が強風とともに我々の挑戦を待っている。昨日までの重く沈んだ胸もさわやかな気分でふくらむ。これこそ山男のみが知る美の世界だ。かじかむ手でシャッターを切るのに忙しい。三時無事設営終る。

アタックまで

ラジュースの故障などで一時は心を暗くはしたが、アタックを待つばかりとなった満足感で一夜をあかす。今日は猛烈な吹雪の訪れだ。こんな日のキジ打ちは一大決心を要する。小便さえ罐へして捨るようなしまつだ。テントの内張には雪の真白なコマカイ結晶がローソクの光りにかがやいている。それが風にあおられてシラフの上に落ちて真白にする。下からは吸い上った湿気でシラフ

はべっとりと重くなる。眠ることの苦痛を今さらながす感ずる。冷えきった体には、あたたかいB・Cの炉辺や甘い汁粉のことが師走のシャバの光景が目にしみついてはなれない。

語り合うことは食物のことに始終する。沈澱1日。まらますセンチな感情につつまれて行く。外はおとろえもみせない吹雪の斷続音だ。

こんな日が3日と続いた。逃げることを考え出すすべては明日1日と、アタック用の罐詰も次々とあけられて行く。Tさん夕方外へ出る。「明日は晴れだ」と叫ぶ声に皆の心は1度に明るくなる、三日間の濁った空気も一度にとんだ。

雲は一片もなく、一番星は独椀の上にかがやきはじめているではないか、晴れ晴れした気持でぬれたシラフにもぐり込む。

明くれば三十日。三時起床さっそく外をのぞく。満月は恍々と四囲を照らしている。大丈夫だ。はりきって炊事にかかる。六時装備もととのったA隊のOさんとIさんB隊の校歌に送られて出発する。日はまさに常念の頭を七色にそめて上がらんとしている。山々は今日の壮途を祝うがごとくモーゲンロートにかがやき出した。

だが風が強い、凍傷の心配を気ずかって待つテントへ、4時近くヤッホーが聞える。

独椀のように二つの人影。　成功したのだ。遂に20日間の苦斗も実を結んで、間もなく帰った彼等と堅い堅い握手がかわされた。

登頂した感激に話はつきない。1時頃やっとシラフにもぐり込む。

撤　収

成功の喜びと寒さでねむれなかった夜もあけて、今日は徹收だ。さいわい曇ってはいるが風はない。すっかり凍ったテントをたたんで睡眠不足でかすむ目を開いて、B・Cへと下った。

24年の最後の夜を炉辺を囲んでささやかながら成功を祝しあった。

（註、1949年12月11日より31日法大山岳部大槍往復行）

信州文学碑散歩

（1）

大町南高等学校教諭　福沢武一

大町市内竈神社芭蕉句碑

大町市内を探訪して歩き、竈（かまど）神社へ向う。雪の一面におおった北アルプス一蓮華、爺、鹿島がま近かに立ちはだかっている。

神社の裏から欅の森の中を拝殿の前へでる。筆塚が二基並んでいる。そこに近づく。とともに森の中程の石碑群に目がとまる。その大半は倒れている。

森の中に入り、一基々々首実験する。二十三夜塔や道祖神碑。その一番南端の石碑を助けおこす。台座の切りこみに坐らせ、字をたどってみたところ、一思いがけなくも、これこそ芭蕉句碑。

木のもとは汁も鱠（なます）も桜かな　芭蕉

碑の高さは1メーターにはるかたらない。なめらかな自然石。碑面が中央で屋根形にでっぱってい、木の部分がそり、行の改った**し**の部分が湾曲するといった乱脈さそれが碑に風致を添えている。

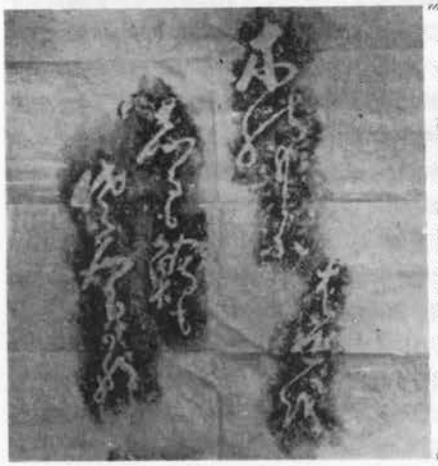
拓本をとってみる。黒北に絣（かすり）が一面に飛び散っている。それがなんともいえず好ましい潤いをかもしいだす。その中に一句が丸味豊かに散らされている。

碑陰には篆（てん）書で、天保15辰仲春とだけ記されている。天保14年は芭蕉150回忌に当り、諸方に記念句碑が建てられた。この句碑もこうした気運にのって、おくればせに建てられたことが推測される。

句意は、――　木の下で花見の酒宴をひらいていると時しも桜の花吹雪がし、ごちそうの汁にも、鱠（すびたしにした魚肉）にも、花びらが散りこむ。酒宴にひとしお興趣が添えられたこと、いうまでもない。とにかく春日の和気靄々たるもの。それを喜んで、天保の大町人士も句碑に選んでいる。この土地は、桜が咲くのは4月末その頃（仲春）を見はからって、この愛すべき句碑の披露に及んだこともほおえましい。

ここは今、欅や杉が木深く繁っている。日ざしのとどかない程に。しかし建句当時は、もっと晴れやかな場所だったはず。

いまは見る影もなく倒され、見すてられた石碑群を目にし、感慨無量である。拓本の終った後も、夕暮の肌寒い一時を僕は立ち去りかねているのである。



碑の高さ70センチ。木のもとにの面、しるも以下の面、各25センチ。台石の高さは30センチ。碑としては最小の部にぞくする。

冬の昆虫

モンキチョウの越冬

八坂中学校教諭　倉田　稔

今日も木枯が梢を吹きまくり、灰色の空からは、肌を刺すような雪がスイー、スイーとまい落ちてくる。春から秋まで私たちのまわりであんなににぎやかに飛びまわっていた、昆虫たちの姿は今はまったく見られず、山野は死んだように静まりかえっている。あのにぎやかだった虫たちは、いったいどこへ行ったのだろうか、寒さのために死んだのだろうか、それともどこか暖いところで静かにねむっているのだろう。

秋のうちに寒さのために死んだのもいる。初冬の霜道に翅を真白に凍らせて死んでいるトンボなどを見たことのある人もいるだろう。クスサン（シラガタロウともいう）のようにタマゴでクリの幹などにしっかりとついているのもいる。モンシロチョウのようにキャベツの葉の下などに蛹でぶらさがっているもの、アカタテハのように成虫で小屋のひさしなどにぶらさがっているもの、またマツケムシのように幼虫のままマツの木の樹皮の下えもぐりこんでいるものなどいろいろある。

最も生活しにくい〝冬〟を越さねばならないのであるから、昆虫たちにとっても〝越冬〟は最も困難な生活上の問題であろう。でも、すべての昆虫たちはその虫なりに、最もすぐれた冬越しの方法をもっているのである。これから順を追って昆虫たちの越冬について解説し、あわせて問題点を記してみよう。

さてモンキチョウの越冬のありさまに入ろう。今までモンキチョウは成虫が春先早く出現するので「越年蝶」（おつねんちょう）と呼ばれ成虫で越冬するものと考えられていたが、実際はそうでなく幼虫で越冬しているのである。なぜ今までこのように間違って考えられていたかというと、春先に早く成虫が飛ぶという現象の一面だけを見て、あとのことを頭の中で考えてしまったからである。私たちはこのように表面の現象だけを見てわかったような顔をすることは絶対にしてはならないのである

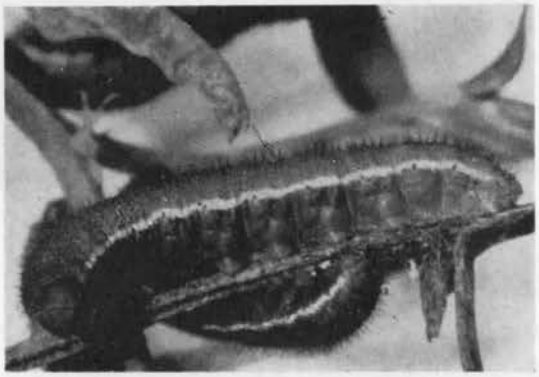
自然界の現象は人間が考えているようなやさしいものではないのである。

長野県のモンキチョウの越冬は今までの調査では、まずその発生した最後の成虫は、晩秋から初冬にかけて卵を食草であるスマメノエンドウ（このほかにも食草はあるがまだ確めていない）にうみつけられ、これからかえった幼虫は冬くの間でも多くの雪などのないかぎり活発に食草をたべ、どんどん成長する。

冬の最中、幼虫はこうりつくような寒い時には食草の上やそのまわりの枯草、石の上などにとまっているが、日中温度が、少し上ると活発に動きまわる。そしてこれらの幼虫は春まで（3月中下旬）に蛹になり、早くも四月中下旬に成虫となって飛びまわるのである。このようにモンキチョウの越冬はマツケムシと同じ幼虫越冬であるがマツケムシのように休眠（冬眠）することなく、単なる冬越しなのである。このようなことはわかったが、まだそのくわしいありさまはわかっていなのである。

次に問題点を一つ書いてみよう。東北地方のモンキチョウは、幼虫のまゝ越冬することは、長野県の場合と変りはないが、休眠（冬眠）をするというのである。はたして冬に休眠するかしないかは大きな問題である。同じモンキチョウでありながら、このように越冬のありさまがその生活場所によって違うことがあるから各地の越冬をくわしく調べることは、その生活史を明らかにする上に特に大切なことである。

モンキチョウは最も一般的なチョウであり、しかもたくさんいるチョウでありながらこのような現状である。



（A）越冬中の5令幼虫（32年2月11日撮影）

（B）越冬中の5令幼虫と2令幼虫（32年2月撮影）

積った雪の変化

冬の感じはおなじ日本でも太平洋沿岸地方と日本海沿岸の地方とはまったくちがっています。これは雪がたくさん降る地方と降らない地方のちがいが原因になるわけで、雪の積る地方と積らない地方と考えることもできましょう。ところで雪は水蒸気（すいじょうき）が結晶になったものであることは誰でも知っていますが、積った雪もその性質がだんだんかわってゆきます。すなわち、雪の結晶は地面に積ると結晶の形がかわりはじめます。まず「あらゆき」から、「しまりゆき」にかわり、「ざらめゆき」にかわってゆきます。

あらゆき　雪が降ってからしばらくの間で、降ってきた雪の形があまりかわっていないものをいいます。手でさわってみるとやわらかい感じがします。

しまりゆき　水分が雪の結晶という固体からいきなり水蒸気にかわる昇華作用（しょうかさよう）ことによって形がかわります。結雪のとがっている先や、するどくなっている角がへらされて円みをもった粒になり、粒と粒の間はかたく結びついています。スコップで雪をきっても切り口がすぐくずれたりしません。

ざらめゆき　ざらめ砂糖のような感じの雪で日射や気温のため氷の粒の一部がとけ、夜間など気温がさがると再び結晶してできる大粒の雪で肉眼で認められます。昇華作用によって大粒のざらめゆきができることもあります粒の大きさによっておおざらめゆき、こざらめゆきとわけます。ざらめゆきの硬さはいろいろですが、日中やわらかで夜間から早朝にかけて硬くなります。

しまりゆきはスコツプで切り取ってもくずれない。雪の城壁ができあがった大糸線ヤナ場駅の構内。

あらゆきをわけてばく進するラッセル車。車体の両側に雪煙がまいあがる。大糸線佐野坂附近。

星座をめぐる伝説

オリオン

大町銀河会　寺島　卓

誰かがその美しさを絢爛（けんらん）といった。冬の星空の王者は、やはりオリオンだろう。神話ではオリオンは海の神ポセイドンとある女王を両親にもち海上も陸上のように自由に歩くことの出来る美男子の猟人となっている。月と狩の女神アルテミスに従って毎日狩をして暮していたが、自身の力を過信するのあまり天下に敵なしと高言したため、大地の女神たちのいかりにふれ、かれらの使わした大サソリに刺し殺される運命となった。そしてオリオンもサソリも星となったが今でもサソリ座が空に輝く夏の間はオリオンはそれを恐れかくれておりサソリが西にしずむと初めて東から現われるとつたえられている。天上のオリオンは両手に獅子皮（ししがわ）の楯（たて）と棍棒（こんぼう）をもって、今にもおそいかからんとする猛牛を一打にせんとみがまえている。オリオン座の二つの一等星のうち、赤星のベテルギュースは変光星として有名で、最も大きな星の一つである。この変光理由は星が脈うつように、ぼうちょうとしゅうしくを続けているためで小さい時で太陽の 700倍、大きくなると1000倍以上になるそうです。

誰でも知っているオリオンの三ツ星はこの三ツ星にお願いすると子供の寝小便がなおると日本伝説にあります

資料室

雪国独特の民具
コッパ

長野県の北西部、新潟と富山の二県に接している白馬岳山麓の地方では平均200Cm位の雪が積る。雪の多いこの地方で生活する人々の生活様式には、雪の少い地方では見られない変った様式があり、使用する道具もまた変っている。ここに紹介する木製の箕（へら）は長野県北安曇郡白馬町で使われている除雪用具であり、コッパと呼ばれている。雪の深い地方では全国どこでも使っているが岩手では雪ベラ、羽後ではカシヘキ、越後ではコスキ、北信濃ではコッパと呼んでいる。写真のコッパの柄の長さは、長いのが、250糎、短いのが100糎あり、継ぎ目のない一枚の板でできている。全国的な傾向として乾いた軽い雪の降る地方ほど柄が長く、湿った重い雪の降る地方ほど柄が短くなっている。このほか地方によって変った形のものが見られ、奥羽の山地ではコナゲベラと呼ばれる巾が狭く鋭利にできている特殊な雪ベラがある。狩人は除雪具というより杖といった呼びかたがふさわしいような巾の狭いコナゲブラを使っている。

（平林国男）

＝山博の友＝

大町銀河会
夢はドームの設置

「けんらんと咲き誇った野辺の花は優しく、そして美しい。けれどもそれは春来たれば咲き冬来たれば枯れるはかない一時の美しさに過ぎない。これに比べると静かな夜の空に、さん然と輝く無数の星々の美しさは、厳かな神秘の世界の美しさであり、無限に続く美しさだ。」（銀河会々報「すばる」第3号より）

大町銀河会は星に魅せられた人たちの集りである。この会は昨年の秋、山岳博物館同好会天文グループとして生れたのであるが、当初から独り立ちする方針をとり、活発な自主的活動を続けながら、会発展の基礎固めを行っている。現在会員は60名、高校生から壮年層にまで及んでいるが、主体は大町在住の若い人たちで占められ、男女ほゞ同数。この会は運営組織として、書記、会計のほかに理事会を置いている。8名（うち4名は女子）の理事は、それぞれ企画、研究、普及、編集などのセンターをかねており、会運営の中核である。彼等は毎月集って月例会の企画を話し合い、会報「すばる」の編集方針を立てる。機関紙は2ページ（半紙1枚）ガリ版刷りの第1号をもってスタートしたが、2号からはタイプ印刷となり、3号は4ページになった。例会の通知や予備知識の資料提供、会員の意見や経験の発表、参考図書や研究グループの紹介、会の宣伝など一括してこの機関紙を利用する方針なので、是が非でも例会の数日前までに全会員の手にとどけなければならず、編集係の仕事もなかなか大変である。

例会は毎月1回、山岳博物館との共催で開かれる。会場に市公民館や博物館を利用することもあれば、市内の学校を借りることもある。会員の中では一番の玄人である森会員（大町北高校）の好意で150ミリ反射望遠鏡が毎回会場に用意される。天を相手のことだから毎回晴天に恵まれるとは限らない。でもこの会は企画したからにはたとえ星一つ見えない雪の降る夜でも行なわれることになっている。そんな時にはストーブをかこみながら、星の神話や天文学の興味ある話題をとり上げて話し合おうというわけ。だが星の見えない夜は会員の集りも悪い。それだけに、例会が晴天に恵まれると会員の喜びもひとしおである。この会は特定の人だけに指導を任かさず、全会員が勉強して自分の経験や考えを発表し、会の仕事もみんなで協力して分担していくことを理想としている彼らは今、冷く光るシリウスやリゲルを眺めながら、サソリのアンターレスが夕べの空に昇る頃までに、会員を100名までに増強したいと語り合っている。

会の人たちの共通の夢は、大町市内にいつでも一般に公開される200ミリ以上の望遠鏡をそなえたドームを設置することである。町の天文熱も次第に高まりつつある。彼らの夢の実現する日もそう遠くはないであろう。

冬の五龍岳へ

大町山の会員有志で冬の五竜岳に登ることになった。日程は24日遠見小屋、25日スキートレーニング、ラッセル訓練、26日遠見小屋、大遠見—白岳—五竜岳—遠見小屋、28日下山。隊編成はチーフリーダ福島融、サブリーダー松沢宗洋、隊員柳沢幸治、武田睦男、竹内剛久、太田昌秀、高橋秀男の總勢七名である。

八方尾根にケーブルカー

近年長野県の観光施設に対する県外資本の進出が目立ってきているが、北アルプス八方尾根にケーブルカーをかける話は昨年度以来話題となっている。

これは東京急行電鉄が地元と協力して、白馬観光開発株式会社（仮称）を作り、スキー場として、また夏山登山基地として有名な細野部落より八方尾根黒菱、ウサギ平に全長1,800米のケーブルカー（ゴンドラ式）をかけようというもので、昨夏8月23日、東急の山田秀介秘書課長、法大福岡孝行助教授らが現地視察に来て話が進んだもので、その後同会社員の数回にわたる現地調査と、建設地測量等の準備もすみ、昨年暮12月24日付で新潟陸運事務所の許可もおり、今年に入っては新春18日、東急五島昇社長をはじめ東急関係者、陸運局、日本安全サク道、中部電力、松本電鉄等関係者一行40余名が白馬村役場に早朝貸切バスで乗込み、待受けた同村議会側及地元細野部落役員と懇談、正午よりは現地調査に出かけ、同夜は細野部落に泊り、翌朝19日快晴にめぐまれて八方尾根に、スキー隊を編成、現地の撮影と各種の調査をすませ、午後3時より細野部落民と懇談会を開き意見の交換を行った。

同計画によると、全長1,800米のケーブルカーは今春雪消えを待って着工し、その上部は八方尾根第二ケルンまでスキーリフトをかけ、夏冬を問わずスキー可能な同尾根に大衆的なゲレンデを作り、電源は中部南俣発電所より直接取入れ、黒菱には收容人員600人のホテルを建て、同尾根を国際観光地にしようというもので、總工費一億円を予定し、数年後に完成の黒部ダムと同地を結び北アルプスを大々的に宣伝しようというものである。

（博物館だより）

12月21日～22日諏訪湖カモ類観察及び撮影本館学芸員
12月22日（日）染色同好会ろう染実習（本館講堂）登山同好会遭難史の研究（本館会議堂）山の歌声同好会クリスマスのつどい（本館講堂）
12月28日（土）御用納
12月29日～1月3日年末年始休館
1月4日（土）御用始
1月7日（火）大町山の会　（登山同好会改称）幹事会（公民館会議室）
1月10日（金）銀河会理事会（公民館会議室）
1月12日（日）北安郡市社会教育研究会（公民館講堂）本館学芸員2名出席
1月14日（火）本館同好グループ代表者会議（公民館会議室）
1月19日（日）大町山の会スキー練習（大町スキー場）銀河会理事会（公民館会議室）
1月12日（火）山の歌声組織委員会

……（新設スキー場紹介）……

佐野坂高原スキー場

雪で名高い大町以北、その中でも佐野坂といえば誰知らぬ者もない雪の名所。例年冬になればこの峠でバスも行止りとなる豪雪地帯であるが、この佐野坂に今年よりスキー場がお目見えした。

このスキー場は大町附近には珍らしい北向き斜面が主で、1万坪のゲレンデは大すり鉢状で、中央の平地には工費40万の休息場売店を持ち、初心者用のロープウエイもついている。右眼下にはエメラルド色に輝まる青木湖左には四ヵ庄平一帯と白馬、雨飾、赤倉から志賀高原浅間山、霧ヶ峰も一望できる高原スキー場である

4月上旬までスキー可能。

今月の寄贈　国立科学博物館研究報告（第41号）

1冊東京都国立科学博物館　**まどのゆき**2冊（20.21号）新潟県積雪科学館　**山嶺**1冊（333号）東京都東京野歩路会　**自然科学と博物館**1冊（9～10号）東京都国立科学博物館　**立教大学博物館研究**1冊（第1号）東京都立教大学文学部　**納本週報**1冊（第48号）　東京都国立国会図書館　**考古学資料目録**1冊東京都国学院大学　**山と溪谷**1冊　東京都山と溪谷社

編集後記　雪のない新春を迎えて、岡に上った魚然としていた山男たちも、このところ連日の降雪に目を輝かしている。北ア山麓スキー場はどこも大入満員。博物館苑地は豆スキーヤーで大にぎわい。昨年生れた「大町山の会」では冬の五竜岳に挑む。こんなとき新企画による本紙ができあがった。

山博の建設に忘れることのできない福島君の未発表の遺稿が発見された。奇しくも逝って7年。あらためて同君の生前を偲び新春の本紙を飾ることにした。

1957年は山博を中心にした小グループがぞくぞく誕生した。ことしは、生れたそのグループがさらに拡大され強化される年だ。まだまだやることがたくさんある。本紙も希望をもって頑張りたいと思う。